



七いろの人生

村松梢風



三笠書房

七いろの人生



1958年12月5日 第1版刊行

著 者 村 松 梢 風
むら まつ しよう ふう

刊行者 竹内 富子

定 価 290円
地方価 300円

株 式 三 笠 書 房
会 社

東京都千代田区神田神保町二丁目

電話九段側 6504 振替東京 22096
7483

© Sigeru Tonomura, 1958. Printed in Japan

堀内印刷・徳往製本

目次

七いろの弁	七
逢いびき	九
昔のヤクザと今のヤクザ	一六
次郎長余談	二四
ミス・カーニバル	三〇
美人	三四
照葉	三七

中国の女芸人	．．．．．	九
夕顔	．．．．．	一〇六
女の手紙	．．．．．	一二四
ナイトクラブ	．．．．．	一二六
松だけ山	．．．．．	一三〇
女傑	．．．．．	一三四
仕立屋	．．．．．	一三八
芸の標準	．．．．．	一三八
亀	．．．．．	一四四
浅草	．．．．．	一四六
親と子	．．．．．	一五〇
梅ヶ香	．．．．．	一五七
海岸	．．．．．	一六三

スペイン	．．．．．	一六七
寝酒	．．．．．	一七五
日本女性と排外思想	．．．．．	一七九
猫	．．．．．	一八三
男装の麗人	．．．．．	一八五
コーカサスの酒と女	．．．．．	一九一
黒人	．．．．．	一九六
夏草	．．．．．	二〇一

七
い
ろ
の
人
生

七いろの弁

ちと変てこな題だから、申し訳けから書いておかなければならないと思う。

「七いろの人生」といっても、私の人生が五色だの七いろだの、複雑多彩に変化して、光彩陸離、たんげいすべからざるものであるのをご披露申し上げるという意味ではない。随筆を書かないかといわれた時に、なんとなくそんな言葉が頭に浮んだので、大して吟味もせず、それを使ってみたに過ぎない。しかし題名がこうきまれば、内容も多少それにそうようにしたいものだ。

「七」という数字は日本では昔からいろんな場合に使われている。「七不思議」「七ツ道具」「七変化」などはもっとも有名だ。七不思議は日本中いたるところにあるらしい。七ツ道具は弁慶が使い始めたようになっていたが、そうかと思うと横丁のおめかけさんが銭湯へ行く時持っていくおしゃれの道具を、やはり七ツ道具といった。七変化は踊りだが、何と何に変るのだ

か知らない。

「七味とうがらし」「七宝焼」「七絃琴」「七福神」「七面鳥」「北斗七星」「七夕祭り」「七社権現」「秋の七草」「身延の七面山」「奈良の七大寺」「七堂伽藍」などがある。

「七生」は七度生れ変ること、楠正成が湊川で戦死する前に「七度び生れ来て朝敵を亡ぼせ」と一子正行を訓戒して故郷へ帰した。そうかと思うと「七生まで勘当」などというものもある。「八百屋お七」は少し無理かな。「七めんどくさい」はどこから出た言葉か。「七顧八倒」は苦しむ表現。「七難」は明かにお経から出ている。応挙の名作に「七難七福図」というのがある。「初七日」「七回忌」「七条の袈裟」も仏教だ。「七里けっぱい」は「七里結界」のなまりだと辞書に出ている。「七枚起請」は固い誓約書で、昔の武士が二心なきことを示すために主人に差出したり、恋人同士が取り交したりした。

「七十」を古稀「七十七」を喜寿という。中国には「七経」だの「七言絶句」だの有名な「竹林の七賢」などというのがある。そうかと思うと古代ギリシャにも「七賢人」があるそうだ。「七つの海」も世界的だ。

拾い出したら際限がない。太陽の光を分析した場合に現われる色が、赤、橙、黄、緑、青、藍、紫の七色だそうだから、まんざら迷信から出た数字とばかりもいえない。

私の郷里の生れた家の前に山があつてその断崖の樹木うっそうたる下を川が流れていて、そこに水車小屋があり、たいへんさびしい場所だったが、どういうわけか村の人はそこを「七いろ」と呼んでいた。そしてそこには「七いろ狐」というのがすんでいてよく人を化かすといわれて、子供の時分は怖かったものだ。同時にそこは水が清くて大きな螢が出るので有名だった

ので、夏の夜、姉や下婢につれられて螢を捕りに行ったものだが、誰かが「ソレ、七いろ狐が出た」などとおどかすと、悲鳴をあげて家へ逃げ帰った。

その頃は狐が人を化かすことは一般に信じられていた。しかし狐は必ず美しい女に化けたから、ことによると実在の女を狐にしてしまった場合もあるかもしれない。

要するに、七という数は、無限に変化する意味もあって、多少神秘的である。そんなわけで、私の随筆も、何を書くか分らないということにでもしておいていただこう。

逢いびき

二葉亭四迷がツルゲーネフの短篇「あいびき」を邦訳したのは、彼の伝記によると明治二十一年だそうだから、われわれ今の人はたいがい生れていない時のことだ。私たちがそれを読んだのは、はるか後年、日本の自然主義文学が隆盛を極めていた頃だが、この文豪の傑作は翻訳の完璧と相まって、当時の文学青年にはかり知るべからざる影響を与えたものだ。小説の内容は、猟に出た主人公が林の中で、純真な村の娘が若者とあいびきしているのを木蔭からぬすみ見る、という単純な筋だが、それでいて人生や、不幸になる女の運命をはっきり描き出している。

小説というものは多く人間が幸福になることを書いてはいない。作中の主人公は男でも女で

も不幸になるとか、元来不幸であつたものがこの人生では救いの道がない——とかいったような話が多い。作家の眼というものはそういう風に向けられるものらしい。映画でよく見るような実に都合のいいハッピー・エンドというものは、文学にも、実人生にもめつたにない。実際にはないことだから、娯楽を目的とするせめて映画の上でだけでもハッピー・エンドを人が要求するのだろう。そうして映画はハッピー・エンドでも、そのあとがもし実際に続くとしたら、男も女も、幸福なんてもんからは、だんだん引き離されてしまうのがおちだろう。自分たちだけは幸福な家庭をいとなんでいると、信じている夫婦や、恋人どうしがあつたとしたら、その人たちは、よほどお目出度いか、そうでなければ欲望というものを知らない人たちだからであつて、知っているとんでも非常に稀薄だからである。もし人間の本能の要求するものは、もっと強烈であり、もっと華やかなものであることを知ってその要求を無限に満たそうとしはじめたなら、模範的家庭も、愛の巢も、たちまち紙屑のように吹き飛んでしまうだろう。

社会というものは、古い道徳だの、経済的な打算だのから、一おう安寧が保たれているのであつて、個人の生活もその檻かぎの中にはいつている。恋人どうしが、永遠に幸福でいるなどということは、地球が回転している限りありえないことである。

さて、ツルゲーネフの「あいびき」に話を戻して、ロシアの田舎の愛らしくて美しい「アクリーナ」という百姓娘が、貴族のボーイか何かしている、金モールや腕飾りのついた制服を着た、典型的な女たらしで薄情な「ヴィクトル」という若者のたねまでやどしているらしいのに、男はこわれた木靴の片方でもほうるようには見棄てて、明日はご主人のお供をしてペテルスブルクへ帰るといふので、これが最後の「あいびき」を白樺の林の中でしているのだ。

それでも娘は男を愛し切っている。これまでにどれほど幸福な逢いびきを重ねて、彼女は有頂天になったかしないのに、恋の結末はこの有様である。

「アクリーナ」は、ツルゲーネフの小説ばかりでなく、現代でも、どこにでも、いっぱいいる。

恋をするということは、どうしてこんなにたのしいのだろう。そして、どうしてこんなに人間を愚かにしたり不幸にしてみまうのだろう。

私は、東京でも丸ノ内か銀座しかほとんど知らないが、銀座辺を歩いている若い男女はまずほとんどアベックだ。まれに三人くらいの女連れというのもあるが、そういうのを見ると特殊事情だろうと思うくらいだ。いかに大都会とはいいいながら、よくもこれほど無数のアベックが出来上るものだ。

さてこのアベックだが、どこで出逢って来たのだろうか。最初から一緒に家を連れだって出る組の中にはあるだろうが、まず少ないことは服装の支度などからもおおよそ想像される。最初にどこかでランデブーをして、それからアベックになるという段取りだろう。近頃の女の子は英語の「デート」という言葉を多く使うらしい。ランデブーの場所は、昔は公園の木蔭かベンチの上とたいていきまっていたが、いまではそんなに特定の場所を必要としない。どこかの町角でも、安喫茶店でも、百貨店の一階の何々売場の前でも、利用する場所はいくらでもある。

しかしそういうのは、どちらもおフィスに勤めているかして、非常に気軽にやれるのだが、少しめんどろなのは、一日前とか二日前から約束して、新橋駅とか有楽町とかで待ち合せるやつだろう。「有楽町で逢いましょう」というくらいだから、有楽町界限がさかに活用されて

いるのだろうか、あそこはあまり雑とうしているので私などは気がつかずに通ってしまう。そこへいくと新橋駅の建物の中は、落ちついてもいるし、多少ロマンチックな気分もあって、ランドラーには好適所だろう。私は横須賀線を新橋で降りることが多いので、その改札口を出ることになっているが、あの建物の中には、壁際や、角柱のかけに、どんな時でも、二、三十人以上の人が立って、だれかが改札口の方から出て来るのを待っている。

電車が着くたびに、両側の石段から降りるたくさんの人が、改札口の方へ流れて来る。夕の四時、五時頃だと、これから銀座のバーやキャバレーへ出勤する女性たちが、勢いよく建物から飛び出して行く。

無数の人が吐き出されて来るが、壁際に添って待っている人の相手はなかなか来ないものである。降りて来る大勢の人の中に、恋人の姿を描いては、そのつど失望する。といってまだ望みを捨ててしまったわけではない。ようやく、十分も十五分も約束の時間より遅れて、どうかすると三十分も遅れて、相手の頭だけを、大勢の人の中に発見した時のよろこびと安堵。ランドラーの真髓はこの一瞬にある。

不思議なことに、待っているのは、男よりも女の方がいつも多い。本来なら、男の方が先に行っているべきであると思うが、反対である。ツルゲーネフの「あいびき」の場合でも、アクリーナは一時間も前から白樺林の中へ行って坐っていたのだ。かすかな物音にも耳をそばだてたり、時々深い溜め息をついたりして。

新橋の駅では、白樺林の中のように静寂ではない。それでも時々不安そうな目つきをして、円い高い天井の方を仰いだり、駅の前にタクシーが停って、客が降りたり乗ったりするのを落

ちつかず眺めたりするが、電車が着くたびに、緊張した顔を改札口の方へ向ける。

ああ！ 彼はいつ来るだろう？ この恋愛には、まちがいに不幸だけがあって、幸福などありっこない、といった風に、その光景は見える。

「ランデブー」というフランス語は「時間と場所を約束して面会する」ということで、日常事務的に使われている。それがいつとなく恋人どうしが逢いびきすることにも転用されるようになり、同時に世界各国に普及して、いまでは完全な世界語になってしまったのだという。フランス以外の国では、男女の「逢いびき」の意味にだけ使われているそうだが、本家のフランスではいまでも堂々と事務的に使われている。ことに婦人が「いまからランデブーに行くのよ」などというと、語学の知識のない私などは妙な気持がした。私はパリで有名な日本の女性から二度その言葉を聞かされた。

一人は谷洋子さんだ。私が初めて彼女を見たのは、パテー・オーバーシーズのプロデューサー、ジャック・ファノー氏の家で、私がファノー氏を訪問すると、そこに、やや小柄で、長く垂れた黒い髪と、小麦色の皮膚をもった、黒のセーターにズボンをはいた若い女性がいた。私は日本人というよりも東南アジア人だろうくらいに思っていると、それが谷洋子さんだった。彼女は当時カジノ・ド・パリに出演したり、モンパルナスの劇場で上演中の「ティー・ハウス」にオキナワの芸者役で出演したりして、フランス人の間にはちょっと有名になりかけていたが、パリ在留の日本人は一人も彼女を認めようとはしなかった。

私は彼女に非常な興味をよせて、それ以来かなり親しく交際していた。ある日の夕方、彼女は私を訪ねて来て、いろいろ面白い話を聞かせてくれる約束、そのあとキャバレーへでも案内

してもらうつもりだったところが「きょう六時にランデブーがあるから」という。場所はどこですかとときくと、シャンゼリゼーだという。重要な仕事の話らしい。それじゃそこまで送ってあげようと一緒に外へ出たが夕方のこと空のタクシーがいくら待っても来ない。仕方がないからバスに乗って私もついていったが、シャンゼリゼーに着いた時は六時を二、三十分過ぎてしまった。彼女はあわてて一軒のキャフエへ飛び込んで先方へ電話をかけていたがどうしても通じない。「とにかくあたし行くから」と彼女は私をそこにはったらかして、キャフエを飛び出すと、夕暮の雑とうを極めているシャンゼリゼーをハイヒールで一目散に駆け出していた。もう一度は石井好子さんだった。石井さんが一度日本へ帰って、またパリへ戻ってブラブラしている時だった。「一年くらいは勉強するつもりで帰って来たんだけど、以前の仲間が仕事をしているのを見ると、自分もやりたくなるわね。芸人って特別嫉妬心が強いのかしら」と彼女はいつていた。

その日彼女は私をダミアの家へつれていってくれた。彼女はおそろしくダミアに愛されているらしかった。ダミアの私に与えた印象は強烈なものだった。彼女はシャンソンの泰斗であると同時に、素晴らしい詩人である。

やはり夕暮の六時頃、ダミアのもとを辞してタクシーで戻って来る途中、石井さんは「わたしこれからランデブーがあるのよ。悪いけどここで降ろして下さいません」と同じシャンゼリゼーの中頃で車をとめて降りた。芸能関係のオフィスは多くこの辺にあるらしい。

谷洋子は今度イギリス映画「風は知らない」に主演して一躍スターになり、石井好子は長期契約で外国を歌いまわっている。